くんちニュース

やへたまち

平成２６年度　第１号

発行：八幡町くんち奉賛会

平成２６年５月１日

八幡町のくんち奉納について

八幡町の変遷

寛永２０年（１６４３）天台宗の大覚院存性坊という修験者が、新紙屋町に大覚院南岳寺を創建。更に３年後の正保３年（１６４６）には、京都山城国から八幡宮を勧請して院内に祀ったのが、現在の八幡神社の起源。この神社がお祀りされたことにより、町名も延宝８年（1680）新紙屋町から八幡町に改められました。

奉納の歴史

八幡神社の開祖が山伏の存性坊であり、また山伏は諏訪神事にゆかりが深いので、古くから奉納踊りに「山伏行列」や「山伏踊」を奉納していました。（大阪府立中之島図書館所蔵の崎陽諏訪明神祭祀図に八幡町の山伏行列も描かれている：1800 年～1818 年頃)。八幡町の剣舞が、奉納踊に登場したのは大正４年からで、以来、奉納回数を重ねる毎に定着していきました。そして、昭和６０年からは弓矢八幡祝い船を、八幡町の新しい演し物として奉納され現在に至っています。

【大正以降の奉納踊り】

大正　４年	傘鉾・剣舞
大正１１年	傘鉾・剣舞
昭和　４年	傘鉾・剣舞
昭和１１年	傘鉾・剣舞
昭和１８年	(戦時中のため奉納踊り自粛)
昭和２５年	傘鉾・剣舞
昭和３２年	傘鉾・山伏道中・本踊
昭和３９年	傘鉾・山伏道中・剣舞
昭和４６年	(奉納辞退)
昭和５３年	傘鉾・山伏道中・本踊
昭和６０年	傘鉾・山伏道中・弓矢八幡祝い船
平成　５年	傘鉾・山伏道中・剣舞・弓矢八幡祝い船
平成１２年	傘鉾・山伏道中・剣舞・弓矢八幡祝い船
平成１９年	傘鉾・山伏道中・剣舞・弓矢八幡祝い船
平成２６年	**傘鉾・山伏道中・剣舞・弓矢八幡祝い船**

傘　　鉾

傘鉾とは、祭礼に用いる飾鉾であるが、現在は踊町の先頭に立ち町の印を表すものです。八幡町という町名は、町内の守護神である八幡神社に由来しています。八幡神社は、昔から弓矢八幡と呼ばれ、武勇の神であり、白鳩は八幡様のお使いであることから、傘鉾の飾り（だし）は、朱塗りの弓矢台に重籐の大弓２張りに２４座の黒斑の征矢に白鳩が３羽留まっています。重籐の大弓の収納箱には、「明治廿六年第十月造之」と記載されてあり、その下には世話人　永島栄三郎氏ほか数名の名前が明記されてあり、おそらく、この年に新調されたと考えられます。

輪は注連縄飾りで、垂れは、平成５年に７０年ぶりに新調、平成１２年に刺繍で追調したもので、塩瀬羽二重・手描き友禅染め、八幡様の本宮である京都・男山八幡の景に、白鳩が羽ばたく様子が、金駒・相良・平縫い三種の刺繍仕上げで描かれており、長崎で一番背が高い傘鉾と言われています。

輪が注連縄の場合、昭和初期まで傘鉾の担ぎ手の衣装は、白丁であったことから、平成１２年、伝統を受け継ぐ意味で、法被から白丁へ新調しました。

山伏道中

昔から八幡町は通り物に分類される「山伏行列」を奉納していた。
現在は、「山伏行列」の形態を引き継いで、先曳「山伏道中」として奉納しています。本職の山伏、英彦山不動院　高橋敬亮副住職が法螺貝を吹き先導し、山伏姿の０歳から幼稚園児までの男女が続きます。

剣　　舞

平成５年に２９年ぶりに小学１・２年生の男女で復活した八幡町伝統の奉納踊。平成１２年の奉納では、中学生以上の独身女性による成年部も出来ました。中学生になれば女性は出場の機会がなくなっていましたが、成年部の編成で、年齢の巡り合わせで囃子や少年剣舞に出場できなかった女性も一度は参加出来るようになりました。まさに町民総参加の奉納となったところです。少年剣舞４名と成人剣舞１２名で構成しています。

弓矢八幡祝い船

昭和６０年に初めて奉納された演し物。弓矢八幡祝い船は、諏訪神社へ奉祷文を奉納しようと、山伏達が侍大将に守られ海路より長崎港へ到着した模様をあらわしています。踊り場へは、弓矢八幡祝い船に乗った鎧兜姿の侍大将が奉祷文奉納と、従者の山伏を両脇に従え、山伏６名の囃子で入場します。船の曳回しは、根曳の気合い、姿勢、勢いで大海原を渡航する荒々しさを表現している。船は和船で、長さ５．６５m、帆を揚げた時の最高の高さ５m、重さ２．５ｔとも３ｔともいわれています。

長采１名・添根曳４名・根曳２０名（左右両舷１番が交代）・侍大将１名・囃子３班１８名（大太鼓３名・〆太鼓６名・大鐘３名・小鐘６名）奉祷文・従者の山伏は大太鼓３名が交代で務めます。

ご　挨　拶

八幡町くんち奉賛会
会長　橋　本　　清

町内の皆様には日頃より自治会、奉賛会活動に御協力賜り心より感謝申し上げます。

さて、今年のくんち踊町参加につきましては、平成２４年の八幡町自治会総会において承認を得、直ちに奉賛会組織を再編し、準備を進めてまいりました。

まず、今回も町の由来や奉納の歴史に因んだ演出で「傘鉾・山伏道中・奉祷文・剣舞・弓矢八幡祝い船」を奉納することを決定し、昨年１０月には弓矢八幡祝い船の根曳、囃子、成年および少年剣舞、先曳である山伏道中の参加者募集を行い人員も確保できました。

いよいよ踊町当年を迎え準備を整える時期となりました。

「くんち」は、氏子である町民がこの一年間、諏訪神社の神々から見護っていただいた御神恩に感謝し、踊町奉納や年番町奉仕を務め、ご神霊の再生を願う祭りといわれています。私共はこのことを念頭において本番までに準備万端整え、踊馬場に「神人和楽」（神も人も和して楽しむこと）を現出するような奉納をしたいと考えております。

一方、当年の踊町や年番町においては、本番の１０月７・８・９日の３日間だけではなく、本番前までの長い期間にわたるさまざまな準備から本番後の後処理・整理が終了するまでが「くんち」であるといえます。そして、この「くんち」踊町の役割を務め上げるには相当な労力と資金を要しますが、近年の景気の状況、自治会員の減少などによる町内寄付金や庭先回りの御花の減額に加え、前回（平成 19 年）踊町の際の大雨で傘鉾、弓矢八幡祝い船はじめ様々な備品が損傷し、新調あるいは補修しなければならない状況で大幅な支出増が予測されます。

このようなことから、町内の皆様には物心両面多大なご苦労をおかけしますが、７年に一度の大事業である八幡町の「くんち」成功と共に３８０年間脈々と受け継がれてきた「くんち」を次の世代に引き継ぐためにも、更なる御支援，ご協力を賜りますようお願いします。